

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2025 年度
氏名	寺嶋陽奈	指導教員 (主査)	諏訪絵里子准教授

論文題目	大学生の子育ての社会化志向に影響を与える要因の検討 —愛着、共感性、親性準備性に着目して—
------	--

本文概要
【研究目的】子どもや子育てに関する問題が山積する我が国においては、社会の構成員一人一人が、社会全体で子どもの育ちと子育てを主体的に支えようとする意識である「子育ての社会化志向」を育むことが重要である（扇原，2018）。しかし近年、若者の中には子どもや子育てを否定的に捉え、親になることに消極的な者が増加している（本田，2009）。親になることを肯定的に捉え、親になるためのレディネスを備えていることは親性準備性と呼ばれ（伊藤，2019）、この低さは、子育ての社会化志向を抑制する可能性がある。また、他者の問題に対して当事者意識を持ち、他者を支えたいと感じる傾向は、他者志向的な共感性という概念で理解することができ、他者志向的な共感性の高さは子育て世帯への寛容さや援助行動を促進することが示されている（Batson et al., 1981）。さらに、共感性は親の資質として重要であり（小原，2005）、親性準備性とも関連する可能性がある。一方、子どもや子育てに対する認識には幼少位の養育者との関係に基づく愛着が関与しており、安定した愛着をもつ者は親性準備性が高く（松本・重橋，2007）、不安定な愛着をもつ者は共感性が低いことが示されている（大浦，2019）。そこで、本研究では、若者の親性準備性および他者志向的な共感性が子育ての社会化志向に及ぼす影響を明らかにし、その影響が愛着によって異なるのかを検討する。それにより、今後の社会を担う若者の子育ての社会化志向を醸成するアプローチ方法への提言につなげることを目的とする。 【研究方法】大学生 191 名（男性 62 名，女性 124 名，その他 5 名，$M=19.41$，$SD=1.01$）に質問紙調査を行った。調査材料は、①フェイスシート、②子育ての社会化志向尺度（扇原，2018）、③親密な対人関係尺度の一般他者版（中尾・加藤，2004）：愛着の二次元である「見捨てられ不安」と「親密性の回避」を測定する尺度、④日本語版対人反応性指標（日道他，2017）の 4 因子のうち、他者志向的な共感性を測定する「共感的関心」「視点取得」の 2 因子、⑤親性準備性尺度（佐々木，2007）であった。 【結果・考察】各因子について、見捨てられ不安および親密性の回避の高低による群間比較を行った結果、愛着が不安定な者の方が親性準備性が低いことが示された。次に、相関分析の結果を基に、他者志向的な共感性の 2 因子を独立変数、親性準備性を媒介変数、子育ての社会化志向に従属変数としたモデルを作成し、見捨てられ不安の高・低群および親密性の回避の高・低群による違いを検討するために、多母集団同時分析を行った。その結果、モデル適合度は見捨てられ不安の群別で $GFI=.99$，$AGFI=.99$，$CFI=1.00$，$RMSEA=.00$，親密性の回避の群別で $GFI=.99$，$AGFI=.96$，$CFI=1.00$，$RMSEA=.00$ と、いずれも十分であった。また、愛着を見捨てられ不安と親密性の回避のいずれの視点で群分けした場合でも、概ね同様の影響構造が示された。いずれも愛着が不安定な場合は、共感的関心の高さのみが子育ての社会化志向の高さにつながっていた。一方、愛着が安定している場合には、共感的関心の高さは子育ての社会化志向の高さにつながっていたが、親性準備性から子育ての社会化志向への影響の方が大きかった。また、視点取得の高さが親性準備性を介して子育ての社会化志向の高さへつながる経路は、安定した愛着を持つ場合に限られた。以上より、子育ての社会化志向の形成には、他者志向的な共感性と親性準備性の双方が関与するが、愛着が安定している者では、親性準備性を促進することが、子育ての社会化志向を醸成する上でより効果的である一方、愛着が不安定な者にとっては、共感的関心を促進する介入が有効であることが示された。